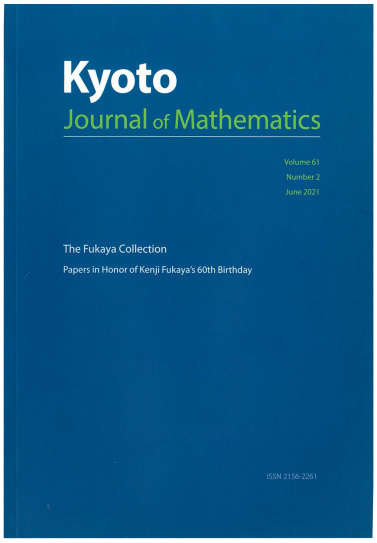
# 数学ジャーナルだより

## Kyoto Journal of Mathematics




京都大学大学院理学研究科数学専攻
藤原　耕二

Kyoto Journal of Mathematics（KJM）について，マネジング・エディターとして紹介します．KJM の前身は Journal of Mathematics of Kyoto University で，この雑誌は 1961 年から出版されていました．KJM に変わったのは 2010 年で，出版社が紀伊國屋書店から Duke University Press（DUP）に変わり電子体も加わりました．この変更には三輪哲二先生が尽力されました．

KJM は年に 4 回発行し，合計で 900 ページ余りです．編集体制ですが，チーフ・エディターが 2 人，そのうち 1 人がマネジング・エディターを務め，エディターが 11 人，アソシエイト・エディターが 24 人います．京都大学数学教室の事務の方が編集補助をしています．編集作業に EditFlow などのソフトは使っていなく，論文投稿は電子メールにファイル添付でお願いしています．投稿された論文について，エディターまたはアソシエイト・エディターから担当者を 1 人決め，査読の手続きを進めます．KJM への年間の投稿論文数は 150 本程度，アクセプトは 30 本程度です．

KJM には冊子体と電子体があり，電子体は Project Euclid で公開されています．完全電子化については今のところ検討はしていません．オープンアクセスに移行する予定は今のところありません．論文の電子体は，公開から 5 年経つと無料で見ることが出来ます．

投稿された論文のリジェクトまたはアクセプトまでの作業は，エディターからなる編集会議で行います．アクセプトされた論文のファイルを DUP に送り，英文や体裁を整えるなどのタイプセット・校正・製本・発送・電子体の作成と公開までを，DUP にお願いしています．DUP との契約上のやり取りは，マネジング・エディターが行います．

バックログの状況ですが，投稿からアクセプトまでの時間は，最近の中央値で 9 か月程度です．アクセプトから印刷までは，2025 年の出版分については 17 か月程度ですが，現時点（2025 年 1 月）ではアクセプト論文が多くなっていて，2027 年第 3 号の分までであります．バックログのコントロールには苦労しています．バックログが多すぎたため，2019〜2020 年にかけて，KJM はページ数をトータルで 800 ページ程度増やし，バック

ログを一気に減らしました．しかし，最近，また増えてしまっている状態です．これは一定のレベル以上の論文が多く投稿されていることによるもので，ありがたい話ですが，編集委員会としてはバックログを減らす取り組みを再び始めています．

査読者には大変お世話になっています．多くの数学会会員にもお願いしていて，この場を借りてお礼を申し上げます．一般的な話ですが，査読者の方に気を付けていただきたいことを書きます．まずは，ジャーナルから依頼があった時，もし出来ないなら出来ないと言っていただけると助かります．一番困るのは，引き受けてくださった後，長い間，レポートが提出されないことです．もし，引き受けた後，事情が変わって査読を辞退したい，または，当初の予定より査読に時間がかかるなら，早めに伝えていただけるとありがたいです．査読が長引いている論文について，著者に時間的な目安を伝えることができます．ご存じのように，査読の依頼には二種類あり，いわゆるクイック・オピニオンを求める場合と，フル・レフリー，つまり全てをチェックすることを求める場合があります．クイック・オピニオンについては，2 週間程度以内の判断を期待しています．フル・レフリーについては論文の長さによりますが，3〜6 か月程度の査読期間を想定しています．KJM へのレポートは任意形式です．査読者の方にお願いしたいことは，論文の価値判断については遠慮しないで明確に書いてほしいということです．日本人の査読者によるレポートにおいて，論文の価値をどう考えているか判然としない場合が少数ですがあります．遠慮せず，専門家としてのご意見をお聞かせください．

マネジング・エディターとして，今後の課題と考えていることを少し書きます．まず，編集作業の効率化と向上のために，KJM に EditFlow などのソフトを導入するのは有意義だと考えています．また，雑誌の完全電子化についてもメリットが大きいと考えています．理由は，冊子体を発行することの価値やメリットが以前に比べて大幅に減ったためです．かつては著名で高額な外国誌を含む多くの数学専門誌を，冊子体の交換によって無料で手に入れることが出来ました．しかし，今では，多くの雑誌が完全電子化をしているか，または，冊子体の交換が中止されています（なお，KJM は電子体の交換は行っていません）．一方，KJM の冊子体の作成と郵送は DUP に委託しているわけですが，高額な費用がかかります．その費用は京都大学数学教室が負担しています．ただし，冊子体の郵送費は京都大学大学院・理学研究科が負担してくれています．

このように，KJM は査読者やエディターの無償の専門的サポートや，京都大学数学教室の運営費からの出費に支えられています．国際的に一定の評価を得ている専門誌を発行することは学術的に大きな貢献であり，そのような雑誌が日本にあることは，日本の数学研究において重要なことです．従って，今後も KJM の発行は続けていくべきだと考えますが，そのためにも効率化と費用削減は必要だと思います．今後も，皆さまからのよい論文の投稿をお待ちします．また，査読についても可能な範囲でお願いできれば幸いです．